

トマス・アキナスの “Analogia Entis” に関する考察

東 光 寛 英

(一)

アナロギアは、普通、論理学においては、類比推理として、帰納推理と演繹推理との関係の下に取扱われる。後者の二つの推理の結論は *demonstrable* だが、前者のアナロギアのそれは *probable* であると云われる。然し、そうだからと云って、アナロギアの価値は低く見られてはならない。アナロギアは仮定を与え、一層厳密な探究がなされるべき指標としての意味をもち、科学に貢献して来た。又、アナロギアは数学では量的関係としてあらわれ、比或は比例的等式即ち $2:1$ 或は $6:3 = 4:2$ で示されたが、アリストテレスはその質的適用をなし、中世人はその質的適用を更に発展させ、有限者と無限者の現実的關係へと持込んだ。トマスは、それを *analogia entis* (有の比論) として、最高の意味で、被造物と神の間の存在の類似性と非類似性に見られる対応的關係としての有 (*ens*) の問題となした。ここに、トマスの *analogia entis* は理論上の原初的なアナロギアたる数学的アナロギアと異り、形而上学的性格の極めて深いものである。

アナロギアは *aequivocatio* (同名異義) と *univocatio* (異名同義, 同名同義) との区別により明らかになるが、アナロギアは *aequivocatio* でもなく *univocatio* でもなく、その中間的なものである。アナロギアは、トマスでは、*analogia proportionis* (比のアナロギア) と *analogia proportionalitatis* (比例性のアナロギア) とに二大別される。更に前者のアナロギアは *analogia multorum ad tertium* (多の第三者への関係のアナロギア) と

analogia unius ad alterum (相互関係のアナロギア) とに分れる。後者のアナロギアは analogia proportionalitatis impropriae (非本来的対応性のアナロギア) と analogia proportionalitatis propriae (本来的対応性のアナロギア) とに分れる。一方のアナロギアは譬喩的アナロギア (analogia metaphorica) であるが、他方の analogia proportionalitatis が真のアナロギアである。この真の本来的アナロギアは、被造物間の秩序では、例えば肉眼 : 身体 ≠ 理性 : 精神の様な姿であらわれるが、被造物と神との間では、Deus : suum ens ≠ creatura : suum ens 或は Deus : suum ens :: creatura : suum ens と云う風に示され得るだろうが、被造物の間のみではなく、むしろ被造物と神の間のアナロギアにトマスの analogia entis の真意があり、それは神の認識を意図とするものである。analogia entis は、トマスでは、単なる論理ではなく、神のロゴスと人間のロゴスが呼応的に下向運動と上向運動との二重性を構成する論理であり、世界を神との正しい関係にもたらず唯一の道であり、神と人とが語り合う宇宙的調和の場である。⁽¹⁾

本稿では、以上の様な単なる外面的構造、分類、名称ではなく、aequivocatio, univocatio, analogia の内面的関係、並に analogia entis の内部における analogia proportionis と analogia proportionalitatis との内面的関係についての考察の一端を論点とする。

(二)

アナロギアは、aequivocatio でもなく univocatio でもなく、両者の中間的なものである。⁽²⁾ aequivocatio (同名異義) は地上の犬と星座の犬の例の様に「犬」の名称は同一であるが、その意味は相異っている場合である。univocatio (異名同義) は人間と牛の例の様に名称は夫々相異っているが、それらに対する意味としての「動物」と云う点では両者は同一である。アナロギア (類比) は身体の内眼と精神の理性との例の様に名称も意味も相違しているが、両者の関係がみる (videre : intelligere) と云う点におい

て対応的に (proportionaliter) 同等である。この様にアナロギアは, *aequivocatio* の様に全く異義的でもなく *univocatio* の様に全く同義的でもなくて対応的に同等が云われるので, その対応性 (*proportionalitas*) の下に, 両者の相違性 (*diversitas*) の側からは *aequivocatio* が隠蔽されているし, 両者の統一性 (*unitas*) の側からは *univocatio* へ到る面が生ずる。この様な意味でアナロギアは, *aequivocatio* や *univocatio* ではないが, 両者の面を含むと云うことも出来る。⁽³⁾

扱而, 星座の犬と地上の吠える犬は, アリストテレス流に云えば, 偶然的 *aequivocatio* (*ἀπὸ τῶς ὁμώνυμου*)⁽⁴⁾ 或は *aequivocatio pura* である。成る程, これら両者の間では, 「犬」の名は *aequivocatio* なるも, 凡ての諸々の吠える犬について云えば, *univocatio* によって云われるのであるから, *aequivocatio* は *univocatio* に還元すること (*reducere*) になる。然るに, この場合, トマスは, 述語上は *aequivocatio* は *univocatio* に還元されるが, 活動上は人間が人間をうむの例の様に人間は同義的能動者 (*agens univocus*) であって, これは特殊的原因であり, 太陽と云う普遍的原因がこれら特殊原因に先行し, 凡ての人間の生成の原因であり, 普遍的原因がアナロギア的能動者であると云うことは, 述語において凡ての同義的なるもの (*univoca*) が同義的でないアナロギア的第一の一つのもの即ち *ens* に還元されるが様であると述べている。⁽⁵⁾ここに *aequivocatio* が *univocatio* との関係においてアナロギアへの還元性を窺い知る。又, この様な狭義の *aequivocatio* と異り, 真の人間とその肖像画について語られる場合の人間 (人間性) は, 偶然的 *aequivocatio* ではなくて, 故意的 *aequivocatio* (*aequivocatio a consilio*) であり, 広義の *aequivocatio* (*aequivocatio largo modo*) である。この場合の *aequivocatio* は自らのうちにアナロギア的なものを含み,⁽⁶⁾ 描かれた人間は真の人間への帰属によって人間と云われるので, 帰一的アナロギア (*analogia attributionis*)⁽⁷⁾ と考えられる。蓋し, James F. Anderson は Boetius の *aequivocatio* の三分類, ①equivocal by chance, ②equivocal

by reference, ③equivocal by proportion を凡て比的或は帰一的アナロギアの場合であると云い、更に①, ②は内的且つ形相的には同義的述語付けに属し, ③は内的且つ形相的にはアナロギア的述語付けに属するものであると注意している。⁽⁸⁾我々は、唯ここでは、Anderson が云っていることから、この三つの *aequivocatio* が帰一的アナロギアの名称の下に *aequivocatio* と *univocatio*, 更に *aequivocatio* とアナロギアの無関係でないことを察知すればよいのである。尤も Anderson 自身はこの三つの分類は正しくないことはないが、*esse* に関係してなされたものではないので形而上学的には不⁽⁹⁾適当で、トマスの「ロンバルツス命題集第一巻註解」の分類が典型的であり、その分類の中の“*analogia secundum intentionem tantum et non secundum esse*”が③の適⁽¹⁰⁾当な呼び名であるとは云っている。免に角、*aequivocatio* はアナロギアとは同一のものではないが、*ens* に関する限り、究極的にはアナロギアへの還元性が看取されると云えよう。

以上見て来た様に、*aequivocatio* と *analogia* との関係のうちに *univocatio* と *analogia* との関係も同時に知られたが、*univocatio* の面から *analogia* との関係⁽¹¹⁾を考察してみよう。ペツルスとパウルスは *univocatio* である。何故ならば、両者は人間と云う名称によって意味される本性の人間性は同一であるからである。然し、両者の *esse* には相異があるので、その意味では *univocatio* ではない。⁽¹²⁾同義的述語そのものは *esse* においては相異があ⁽¹²⁾って結果的には *ens* のアナロギアに静止する。この様に *esse* の面では、*univocatio* はアナロギアへの面があり、アナロギアとの関係が生じて来るが、そうだからと云って、最低度の *univocatio* がアナロギアであり、或は逆に最高度のアナロギアが *univocatio* であると云う訳には行かない。何故ならば、*univocatio* の同一性は絶対的概念的であり、*univocatio* の程度と云うことは同義的智念の現実化の程度である。例えば二人の人間は人間として *univocatio* であって一方の人が他方の人より良いと云うが様である。これは謂わば同義的比較 (*comparatio univoca*) である。然し、形

而上学的真のアナロギアは、*univocatio* のカテゴリーの内に或はその下に、類似や非類似の程度の相は見出されない。真のアナロギアは純粹に対応的統一において単的或は絶対的相違性を含有し、*ens* には *univocatio* ⁽¹³⁾ はないからである。

以上論及して来た様に、トマスでは、*aequivocatio*、*univocatio* と *analogia* の関係性、前者の二つのものアナロギアへの相依性が看知されるのであって、「*ens* はアナロギア的に語らねばならない」のである。何故ならば、*aequivocatio* も *univocatio* も類、種の関係の上になされて来るが、*ens* は最も普遍的概念であり、類、種を支配はするが類、種に制限されず、それら凡ての類、種を超越し而も共通的な包括的概念であるからである。かくして、異類の間の *ens* においては、その統一性はアナロギアによらねばならない。

蓋し、*aequivocatio*、*univocatio* は *analogia* への還元性、関係性はあるものの、これらの区別、相異は明瞭に把握しなければならない。*aequivocatio* は唯、名称の声によってのみ結合される同一性であって、意味上は全く相異っているので、意味上から云えば、「犬」が星座の犬について述語付けられるものは地上の犬について述語付けられなく、その逆も然りである。然し、*univocatio* の場合は牛の動物性と人間の動物性は、その本質的相異は兎も角として、動物性に関する限りでは、その意味は全く同一なので、相互にその名称の「動物」は転置される。アナロギアの場合は、例えば実体 (*substantia*) と偶有 (*accidentia*) における “*ens*” の様に数上、類上異り、意味も両者では全く同一ではないが、対応的に (*proportionaliter*) 同一である。かくして対応性の下に、両者に対する *ens* の相互の述語付け (*praedicatio*) の転置は可能である。ここに、一先ず *aequivocatio* の同一性 (*identitas*) は問題ないとして、*univocatio* と *analogia* のそれには相異がある。前者のそれは *identitas simplex* なるも、後者のそれは *identitas secundum quid* である。かくして前者の抽象された一致性 (*unitas*) は *simpliciter* にあるが、後者の一致性は *proportio* による抽象 (*abstractio*)

からである。その意味で、前者の抽象 (praecisio) は simpliciter 完全なものであるが、後者のそれは不完全なものである⁽¹⁴⁾。然し、後者の抽象が不完全だからと云ってその価値は低く見られてはならない。前者の抽象は事物 (res) に基づいた全体的抽象 (abstractio totalis) であるが、後者の抽象は除外 (exclusio) によるものではなく、ratio の対応的同一性に関する限りの形相的抽象 (abstractio formalis) であって、単なる抽象ではない或る抽象⁽¹⁵⁾である。

(三)

アナロギアの由来は理論上第一義的には数学の領域にある。前述した様に、アナロギアには二種あって、一方は 2:1 の様な analogia proportionis (比のアナロギア) であり、これは単なる比であり、他方は $6:3=4:2$ の様な analogia proportionalitatis (比例性のアナロギア) である⁽¹⁶⁾。この様な数値のアナロギアを、アリストテレスが「ニコマコス倫理学書」B 巻第六章、E 巻第三章、第四章等で徳 (卓越性; ἀρετή)、正 (τὸ δίκαιον) をめぐり (τὸ μέσον) とか均等 (τὸ ἴσον) の質的現実的領域に発展させたのであるが、トマスはこれに従い、トマスではアナロギアは等式による数学的比例式では示されない一層複雑な含蓄深いものとなる。

トマスは、analogia proportionis を前述もした様に二つに分類している。即ち一つは analogia multorum ad tertium, 多の第三者への関係のアナロギアであり、他は analogia unius ad alterum, 一方のものの他方のものへの関係のアナロギア即ち両者の相互関係のアナロギアである。トマスは analogia proportionis の实例として、尿、動物、医薬、食物と「健康」との例、並に、実体と偶有における “ens” の例をアリストテレスに従ってとりあげている。この場合、Garrigou-Lagrange は、「真理論」(q. 2, a.11, R.) に従って、analogia proportionis を凡て帰一的アナロギア (analogia attributionis) であるとなし⁽¹⁷⁾、Cajetanus も同様であるが⁽¹⁸⁾、Hans

Meyer は *analogia proportionis* たる単なる比のアナロギアのうちには帰一的アナロギアではないものがある、即ち実体と偶有の関係にしても、分量と性質とが実体に対する “ens” の関係は帰一的アナロギアであるが、実体と偶有そのもの、極言すれば或は実体と分量のみの場合は、その関係は第三者との関係がないので帰一的アナロギアではないとして⁽¹⁹⁾いる。この Meyer の説は「能力論」(q.7, a.7, R.) に従うものである。凡そ、帰一的アナロギアは Averroes によって名付けられたスコラ用語ではあるが、このアナロギアを問題とする箇所は、アリストテレスの「形而上学書」I 卷第二章冒頭以下の言葉「有 (ὄν) と云うものは様々の意味で語られる。然し、それらは一つのもの、或る一つの本性ととの関係においてであって (πρὸς ἓν καὶ μίαν τινὰ φύσιν), 同名異義的ではなくて、それは恰も健康的なものが凡て健康に関係していると同様である云々」に従うものである。動物は健康を受け容れる基体、尿は健康の如何を示す徴、医薬は健康をもたらす原因、食物は健康を保持するものと云う風な意味で、動物・尿・医薬・食物に「健康的なるもの」のアナロギアの名称が付せられる様に、これら諸存在は終局者としての或る同一概念(健康)へ関係している。この様に、凡てのものが一箇の原理に関係しているのであって、その意味で、この様なアナロギアをアリストテレスは “πρὸς ἓν” (一つのものに関して) と称し、同義的な (*συνώνυμα*, *univoca*) 場合の “καθ’ ἓν” (一つのものに即して) と区別している。更に、「ニコマコス倫理学書」A 卷第六章では “ἀλλ’ ἄρα γε τῷ ἀφ’ ἐνός εἶναι; ἢ πρὸς ἓν ἅπαντα συντελεῖν; ἢ μᾶλλον καθ’ ἀναλογίαν⁽²¹⁾” で見られる様に、πρὸς ἓν (一つのものに関して), ἀφ’ ἐνός (一つのもを起源として), καθ’ ἀναλογίαν (アナロギア的に) の三者が選択的に語られ、善の様々な意味では καθ’ ἀναλογίαν を選んでいる所を見ると、一先づ πρὸς ἓν (或は ἀφ’ ἐνός) の帰一的アナロギアと καθ’ ἀναλογίαν の本来的アナロギアとの間に一線を劃し、両者を区分していることは明らかである。その意味で、トマスは、「真理論」(q.2, a.11, R.) において、

尿、動物等と「健康」の例、実体と偶有の“ens”の例を夫々の例の内部における区別はなさず凡てを一括して *analogia propotionis* に含め、「身体
の肉眼に対する精神の理性」の例を *analogia proportionalitatis* として両
者のアナロギアを峻別している。その線に沿っての *analogia proportionis*
を凡て帰一的アナロギアとし、*analogia proportionalitatis* とは区別する
Garrigou-Lagrange や Cajetanus の解釈であろう（尤も Cajetanus がト
マスのアナロギアを問題とする典拠は主として「ロンバルズス命題集第一
巻註解」<d. XIX, q.5, a.2, ad 1>に従ってはいる）。蓋し、トマスの「能
力論」（q.7, d.7, R.）では、実体と偶有にしても、分量と性質とが実体
に対する“ens”の関係は *analogia duorum ad aliquod tertium*, 謂わば第三
者との関係のアナロギアとして示され、分量と実体との“ens”の関係は
analogia unius ad alterum, 相互関係のアナロギアとして示され、更に
「神学大全」（I, q.13, a.5, R.）では、「健康」の例が、医薬と動物の場
合は後者の方のアナロギアに入れられ、医薬、動物、尿等の多項の場合に
は前者の方のアナロギアに入れられている。この様に、「能力論」「神学大
全」では、*analogia proportionis* における *analogia multorum (vel duorum)*
ad tertium と *analogia unius ad alterum* との区別が明確化されている。
その点、「真理論」ではその区別はない。然し、「対異教徒大全」（I, cap.
34）では、その区別は内容的には「能力論」や「神学大全」と一致する。
「能力論」を始めとするこの様な事情に、Meyer の *analogia proportionis*
と帰一的アナロギアとに対する解釈に従うものであろう。かくして、Meyer
はこの様な観点に立って、*analogia multorum ad tertium* の帰一的アナロ
ギアと異り、*analogia unius ad alterum* は第三者との関係がないので、
“ens”に対する両項の関係は内面的であると云う理由で、*analogia propo-*
tionalitatis とは相異あるものの、*analogia proportionalitatis* に同等であ
ると述べ、*analogia proportionis* と *analogia proportionalitatis* とを区別
しながらも、両者のアナロギアの内面的⁽²²⁾ 聯関性を指摘している。

所で、以上の様な結果として、トマスの思想そのものの内部に次の様な問題が起る、即ち「真理論」(q.2, a.11, R.)と「神学大全」(I, q.13, a.5, R.)との間に、一見すれば矛盾がありはしないかと云うことである。「真理論」では前述もした様に *analogia multorum ad tertium* と *analogia unius ad alterum* とは区別なく *analogia proportionis* として考えられていて、*analogia proportionalitatis* と峻別され、*analogia proportionis* には或る限定的関係性状 (*aliqua determinata habitudo*) があるが、*analogia proportionalitatis* には相互の間に何ら限定的関係性状がないと云う理由で、*analogia proportionalitatis*こそ被造物と神の間のアナロギアとして妥当するが、*analogia proportionis*の方は妥当することは不可能だとされている。それに反して、「神学大全」では *analogia proportionis* はそれが可能であるとされている。ここに、「真理論」と「神学大全」の間に一つの矛盾がある様に見える。この両著作におけるトマスの一見の矛盾は「ロンバルズ命題集第一巻註解」(d. XIX, q.5, a.2, ad 1), 「対異教徒大全」(I, cap. 34), 「能力論」(q.7, a.7, R.)を媒介として解決されると思われるので、これら著作について再検討し充分考察する必要がある。抑々トマスの著作年代については Gilson の「トミスムの附録」の Mandonnet 説によれば、⁽²³⁾「真理論」(1256—59)はトマスの初期の作品、「神学大全」(1267—73)は後期晩年の作品で、「神学大全」の第一部(1267—68)においてトマスの思想が円熟の域に達して来る。かくして、トマスのアナロギア思想の上述の一見の矛盾は「真理論」と云う初期著作と「神学大全」と云う最も後期に属する著作との間に見られる訳である。その矛盾を著作年代に応じて、これら一群の著作の思想的変遷を辿りながら、考察してみることにする。

これら一群の著作のうち、最初期の作品「ロンバルズ命題集註解」(1254—56)では、“ens”をめぐって実体と偶有のアナロギアは“*analogia secundum intentionem et secundum esse*”と云う姿で出ている。Cajetanus

はこれを *analogia proportionalitatis propriae* (本来的対応性のアナロギア) として性格付けているし、Anderson はこれは本来的それであると明瞭に断定までしている。⁽²⁴⁾ 然し、トマスは、これが *analogia proportionalitatis propriae* であるとは指示していないし、又この様なアナロギアへ直に解消される实例も明瞭に与えていない。⁽²⁵⁾ トマスは、この場合、実体と偶有について述語されるとき“ens”のみを述べ、即ち唯三つの項のみ述べ、*analogia proportionalitatis propriae* に要求される四つの項に明瞭になり得る形式では述べていない。その実体と偶有の例の与え方に確かにトマスの曖昧さがある。この点、Cajetanus 自身も認めている。⁽²⁶⁾ 蓋し、トマスは唯これを形而上学的アナロギアであると述べようとしているに過ぎない。

トマスのこの实例は事實は確かに、「真理論」で与えていると同じ型であって、「真理論」では、これを *analogia proportionis* と明瞭に呼んでいる。然し、Ralph J. Masiello が云う様に、*analogia proportionalitatis propriae* が潜勢的に (virtually or potentially) *analogia proportionis* に含有され、又逆も然りであると解すれば、Cajetanus が「命題集註解」で論ぜられた *analogia secundum intentionem et secundum esse* の実体と偶有の例を *analogia proportionalitatis* であるとする考えも完全に正当化される。⁽²⁷⁾ Anderson の同様の考えも亦然りである。然し、「命題集註解」のこの実体と偶有の例を当面通りにとれば矢張り問題は残るが、トマスは、「命題集註解」では、*analogia proportionis* と *analogia proportionalitatis* との間の区別をしないで、唯、論理的アナロギアと形而上学的アナロギアとの間の区別、即ち(1)「健康的なもの」の名称が尿、動物、食物等に述語付けられる場合の *analogia secundum intentionem tantum et non secundum esse*, (2)「物体」の名称が可滅物体と不可滅物体に述語付けられる場合の *analogia secundum esse et non secundum intentionem*, (3)“ens”が実体と偶有に述語付けられる場合の *analogia secundum intentionem et secundum esse*,⁽²⁸⁾ これらの間の区別をするためであって、その区別は論理的アナロギアの完全性は形相的なる

も、第一項以外の他項に対して内面的ではないが、形而上的アナロギアに於ては第一項の存在論的完全性が他項と分有関係にあると云うことである。⁽²⁷⁾「命題集註解」に含まれるこの様な曖昧さが少々明瞭な姿をとってあらわれるのが、「命題集註解」に続く「対異教徒大全」(1258—60)で、*analogia multorum ad aliquid unum* と *analogia duorum ad unum ipsum* の区別が生じている。要するに前者のアナロギアは第三者との関係のアナロギアで、後者の方は相互関係のアナロギアでこのアナロギアが第三者との関係がないと云うことが明瞭に云われている。实例としては、前者の方は「健康的なもの」と尿、動物、医薬、食物との例で、後者の方は実体と偶有についての“ens”の例である。この作品に続く「能力論」(1259—63)では *analogia duorum ad aliquod tertium* と *analogia unius ad alterum* の姿をとって、その表現は「対異教徒大全」のそれとは違ってはいるが、意味するところは同一で、要するに前者のアナロギアは第三者との関係のアナロギアであり、後者のそれは相互関係のアナロギアである。然るに、実体と偶有についての“ens”の实例が、“ens”に対して分量と性質とが実体への関係は前者のアナロギアであり、“ens”について分量と実体との関係は後者のアナロギアであると云う風に示され、「健康的なるものの」の例はない。この後者のアナロギアが被造物と神についての真のアナロギアへの指向性を持ち、それが前後関係としての因果的アナロギアとして展開されている。この点は「対異教徒大全」でも事情は同一である。更に、「能力論」に後続するトマスの思想の最も円熟期である後期作品の「神学大全」(I, q.13, a.5, R.)では、*analogia (proportio) multorum ad unum* と *analogia (proportio) unius ad alterum* となっているものの、要するに今ままでと同様に、前者は第三者との関係のアナロギアであり、後者は相互関係のアナロギアであり、その实例は「健康的なもの」と医薬、尿との例が前者のアナロギアで、「医薬と動物の健康」の例は後者のアナロギアである。「神学大全」のこの場所で、殊に注意しなければならないこと

は *analogia proportionalitatis* の言葉を使用しないで、「*analogia* 即ち *proportio*」として、*analogia proportionis* の言葉が使用されていることである。この場合、後者の *analogia (proportio)* が被造物と神の間のアナロギアに妥当することが可能であるとされている。ここに「神学大全」と「真理論」との間に思想的矛盾の問題があったのではあるが、以上の「命題集註解」「能力論」からこの「神学大全」へのアナロギアの思想の経緯の考察から知られる様に、先ず *analogia unius ad alterum* の意味において *analogia proportionis* が *analogia proportionalitatis* への内面的関聯性を察知し得る。更に、「神学大全」の第一部第十三論題の第一項より第五項までと「対異教徒大全」(I, cap. 34)とを総合し考察する時、因果的アナロギアが分有的関係のアナロギアとしてあらわれている⁽³⁰⁾。分有的アナロギアでは、十全なる完全性が非分有なる *Deus* において前在している。被造物と神の間の分有関係は形而上的に最も深奥なものであり、被造物と神の間の分有的アナロギアにおいては、その両者の関係は内面的であり、何ら限定的関係はない。「神学大全」の第一部第十三論題の第五項に至って、分有的因果関係のアナロギアもその *analogia multorum ad tertium* の“*tertium*”は“*unum*”となり(S. th. I, q.13, a.5, R.)、究極的には、非分有存在、*ipsum esse, ens totum* の普遍的原因たる *Deus* となり、Iosephus Greder の古註が指示する様に、帰一的アナロギアが *analogia proportionalitatis propriae* に潜勢的に(virtualiter)含有されると云える⁽³²⁾。かくして、*analogia proportionis* は *analogia proportionalitatis* とは区別されながらも、両者が相互に潜勢的に含有し合って *analogia entis* を構成していることになる。この様な観点で、「真理論」の方に眼を向けると、「真理論」で *analogia proportionis* が被造物と神の間のアナロギアとして妥当することは不可能であるとされているのはこの書の哲学的性格によるものの、*analogia proportionis* と *analogia proportionalitatis* との優劣を論じているのではなく、両者の区別を明確にし、両者のアナロギアの性格を明

隙に把握せんとする意図に出づるものである。然し、以上の様な両者のアナロギアの内面的關聯性に着眼すれば、「真理論」と「神学大全」との一見の矛盾は一応解決はされる。蓋し、この様に、両者のアナロギアの相異性と内面的關聯性を察知すると共に、被造物と神との間の分有的因果關係のアナロギアには、*anlogia entis* (有の比論)として、単に形而上学的問題として云い尽せない最も深奥なもののあることを知らねばならない。

註

- (1) 拙稿「対応性の論理」, テオリア, 第三輯 (近刊)。
- (2) *Comm. in XI Met., Lect. III, P.143, Fretté, Paris. MDCCCLXXXIX : S. Th., I, q.13, a.5, R.*
- (3) Cajetanus, *De Nominum Analogia*, ed. Zammit, cap. X, n.108 ; cap. XI, n. 119, Roma, 1934. トマスは、「ロンバルツス命題集第一卷註解」(d. XIX, q.5, a.2, ad 1) で *analogia secundum esse et non secundum intentionem* をあげ、その例として、凡ての物体が物体性の概念で同等化されることを示している。この場合、論理学者は *intentio* の上から考察して、物体の名称が凡ての物体に述語付けられるの意味で、これを *univocatio* と云い、自然哲学者は *esse* の上から考察して、物体の名称が可滅物体と不可滅物体に述語付けられる仕方は *aequivocatio* と云うと述べている。ここにアナロギアの下に *univocatio* と *aequivocatio* の隠蔽の一面を看取するが、Cajetanus はこれを不等性のアナロギア (*analogia inaequalitatis*) と名付けている (*ibid., cap. I, n.6*)。
- (4) *Arist., Eth. Nic., A, VI, 1096 b 26—27*
- (5) *S. Th., I, q.13, a.5, ad 1 ; De Pot., q.7, a.7, ad 7.*
- (6) *S. Th., I, q.13, a.10, ad 4.*
- (7) Cajetanus, *ibid., cap. II, n.19.*
- (8) James F. Anderson, *An Introduction to the Metaphysics of St. Thomas*, P.127, note 17, Chicago, 1953.
- (9) *Comm. n. I Sent., d. XIX, q.5, a.2, ad 1.*
- (10) *The Review of Metaphysics, P.471, Vol, V, No.3, 1952.*
- (11) *De Verit., q.2, a.11, R.*
- (12) James F. Anderson. *ibid., P.127, note 22.*
- (13) *The Review of Metaphysics, P.469, Vol. V, No.3, 1952.*
- (14) Iosephus Gredt O. S. B., *Elementa Phiosophiae Aristotelico-Thomisticae, I, pp.143—144, 1929.*
- (15) Cajetanus, *ibid., cap. V. n.56. Sicque fit, ut in analogo secundum identitatem in se clausam, ad diversitatem rationum in se quoque clausam comparato, abstractio quaedam, quae non tam abstractio, quam quidam abstractionis modus est inveniatur ;*
- (16) *De Verit., q.2, a.11, R.*

- 17 Garrigou-Lagrange, *Dieu, Son Existence et sa Nature*, pp.531—532, Paris. MCMXXXIII.
- 18 Cajetanus, *ibid.*, cap. II, n.17, n.18.
- 19 Hans Meyer, *Thomas von Aquin, Sein System und seine Geistesgeschichtliche Stellung*, S.157, Anm.13, Bonn, 1938.
- 20 Hans Meyer, *ibid.*, S.157.
- 21 Arist., *Eth. Nic.*, A, VI, 1096b 27—28.
- 22 Hans Meyer, *ibid.*, s.157—158.
- 23 Étienne Gilson, *Le Thomisme, Introduction à la Philosophie de Saint Thomas d'Aquin, Appendice II*, pp.532—535, Paris, 1948.
- 24 Cajetanus, *ibid.*, cap. I, n.3, ; n.3, nota 1.
- 25 James F. Anderson, *ibid.*, p.126, note 13.
- 26 Cajetanus, *ibid.*, cap. III, n.30.
- 27 Ralph J. Masiello, *The Modern Schoolman*, p.104, Vol. XXXV, No.2, Saint Louis University, 1958.
- 28 Cajetanus は“De Nominum Analogia”で(1)の *analogia secundum intentionem tantum et non secundum esse* を帰一的アナロギア (*analogia attributionis*) として取扱い (cap. II. n.21), (2)の *analogia secundum esse et non secundum intentionem* を不等性的アナロギア (*analogia inaequalitatis*) と呼び (cap. I. n.6), (3)の *analogia secundum intentionem et secundum esse* を対応性的アナロギア (*analogia proportionalitatis*) として取扱っている (cap. III, n.30).
- 29 Ralph J. Masiello, *ibid.*, p.104.
- 30 Ralph J. Masiello, *ibid.*, p.101.
- 31 S. Th., I, q.54, a.1, R.
- 32 Iosephus Gredt O.S.B., *ibid.*, I, pp.137—138, scholia 2.